

## 研究会誌の編集に携わって

重見 晋也

アーセナルの床のきしみに囲まれて布製の書見台の上で崩れかけ補修されたページをめくるときの方が、トルビアックの絨毯の静けさに囲まれて薄暗い読み取り機に映し出されるマイクロ・フィルムの画像を見ているときよりも、その雑誌に携わっていた人々に思いをはせることができると感じる。

それは決して、アーセナルの18世紀的建築様式が、トルビアックの超現代的な空間よりも人間的だからというわけではないだろう。それはトルビアックで閲覧できる資料がマイクロ・フィルムにほぼ限定されているからだと感じている。所詮マイクロ・フィルムに保存されたページは、紙の上に印刷されたテキストの質の悪いコピーに過ぎない。オリジナルが色刷りだったとしても、それはモノクロの画像しか見せてはくれないし、場合によってはネガ画像だったりもする。ページ番号が付されていないページは、元の順番を無視して最後にまとめられていたりもする。そうやって、図書館員にクレームをつけ、実物の閲覧許可を求めても結局のところ無駄なのだ。「マイクロ・フィルムはオリジナルの完全なコピーです。」という素っ気ないことばが告げられるだけである。そもそも資料の欠落や損傷具合を告げる挿入画像を含んでいるということだけを考えても、マイクロ・フィルムに残された雑誌は決して実際に印刷され流通した印刷物と等価ではないはずなのに。

残念ながらこうした感想は、フランス国立図書館の Gallica や Google Books のような試みが喧伝される中であって、時流に適してはいないだろう。しかし、まさにデジタル化されすべてをオンラインで確認できるようになるからこそ、デジタル化の対極にある物自体の価値が重要になってくるともいえるはずだ。

カメラが2台備わった数千万円もするといわれるV字型スキャナを使って、自動でページをめくりながら書物をわずかな時間でデジタル化されたテキストは、貴重な資料のオンラインでの閲覧を可能にしたという点で、確かに画期をなしただろう。しかし、その圧倒的な量の故に、デジタル化されなかった些細なことから「non consultable」ということばをカタログに残して図書館の書庫深くに閉じ込められてしまう。しかし、雑誌に掲載されている「consultable」な

テキストは何も作品だけではないのだ。特に雑誌には、広告やお知らせなど雑多なテキストに満ちあふれている。そしてその短いテキスト、単なる文字列が、その雑誌の成り立ちや掲載されたテキストの成り立ちに大きな意味をもって、21世紀の現在に立ち現れることもあるのだ。文芸雑誌といえども、雑誌という媒体は、決して浮世離れしたロマン主義にだけ貫かれているわけではない。それは文化的だったり物質的だったりするさまざまな制約の中でのみ、印刷物として実在しえたのであり、今日なおそのようなものであり続けている。

印刷物を刊行するということ、それは何よりも、多くの人々の参加があってはじめて実現する社会的な活動であり続けている。ペキア方式によるテキストの大量書写、「ランディ大市」へと羊皮紙買い付けに「出陣」するパリ大学の一行。中世の昔から、それが読者へと流通する限りにおいてテキストは、作家の孤独な営みに終始することなく社会的側面に必ず支えられてきた。ところが、フーコーが「キアスム」と呼んだ交叉現象によって、文学作品は個人へと帰属するにいたる。作家の天才こそが作品の唯一の源泉であり、すべての制約から解き放たれて作品を創造するのだ。

しかし、文芸雑誌を前にして、そこで初めて公刊された作品の一部に出会うとき、他のテキストのただ中にあるテキストを読むとき、それは作品がそれ一つで生まれ出たわけではないことをわれわれが改めて確認するときでもある。

こうした雑誌の社会的性格を気づかせてくれるのは、何よりも私が『広島大学フランス文学研究』の編集に短い期間ではあるが携わったからだろう。文学部が千田キャンパスから西条キャンパスへ移転するのと時を同じくして（1994年のことだそう）、それまで写真製版の元にしていたワープロ専用機の字体も揃っていない原稿を、先ず手始めに単一のワープロ専用機で編集し始めたのだ。執筆者のひとりひとりが研究会誌の編集者だった時代は終わりを告げ、編集作業が一人の双肩にかかっていくようになる。執筆要綱に字体などレイアウトに関する規定が盛り込まれるようになったのがこの頃である。

その後ワープロ専用機はパーソナル・コンピュータへと代わり、さらにはDTP (DeskTop Publishing) ソフトを使って本格的な編集もこなすようになった。現在では当たり前のように研究室の片隅を陣取っているパーソナル・コンピュータが仏文研究室にやって来たのも、丁度その頃である。一つの操作を完了するのに、ポインタから変わった時計のアイコンの針がぐるぐる回るのをずっと待っていなければならなかった。デスクトップ・パソコン、ブラウン管のモニタ、

そしてフロッピー・ディスク。今では博物館にでも行かなければお目にかかれそうにないモノが、研究会誌編集の最新鋭の武器だった。最新鋭の武器を使いこなすには相応の訓練が必要であり、訓練には時間がかかる。結果として、次第に研究会誌編集の作業は専門性を高めていくことになり、その共同作業的性格が薄められはしたが、原稿を印刷し製本する業者は必要だった。

仏文研究室のパソコンでの作業量に反比例して、研究会誌を発行するための印刷費を抑えることができるようになっていった。完成させた原稿を渡すときに印刷所の社長が、「紙代だけですよ」と繰り返していたのが、今も耳に残っている。印刷所の儲けが少ないことを強調していたのだろうか、これ以上安くはならないと警戒してのことばだったのだろうか。どちらにしても、最小の投資で最大の効果を引き出すべく、編集の作業はいや増すばかりだった。程なくして広島大学を離れることになったが、この時の経験は、雑誌を編集するという仕事を私に教えてくれることになった。実際、その後も何冊か分からないほどのアクトやプロシーディングスや広報誌を編集することになった。

翻って周りを見渡してみると、フランスなどでも研究成果の公開方法の時流は、紙媒体での印刷から Web での公開へと急激にシフトしてきている。それは研究費が年々削減される大学の環境にあって、DTP によって印刷費用が大幅に抑制されたのと同じ効果をもたらすのだ。印刷所に原稿を渡す代わりに、所定のアドレスにメールで原稿を添付すると、Web サイトに論文が公開される。近い将来、『広島大学フランス文学研究』も Web サイトに目次を載せるようになるだろうか？ Web に掲載された題目をクリックすると PDF ファイルが開いたり、Web ページにテキストが表示されたりするようになるのだろうか？ Web パブリッシングに印刷業者はもはや必要ない。だとすれば、そのときに「必要なのは電気代だけですから」という台詞すら必要なくなってしまうのだろうか？